

みちのくは雲湧きやすし野馬祭

古賀まり子

今年の相馬野馬追は、新型コロナウイルス感染拡大により、規模を大幅に縮小し、無観客で神事のみが行われました。例年なら中村神社の出陣式の後、騎馬武者が各地を練り歩き、雲雀ヶ原祭場で神旗争奪戦や甲冑競馬が繰り広げられるはずでした。来年はコロナ禍が収束し、野馬追に関連する行事が予定通り行われることを切に願っています。ところで、昔から野馬追の頃になると梅雨が明けると言われ、夏の到来を告げる祭でもありましたが、今年はいまだに降雨の日が続いています。一日も早く青空に雲が湧き上がる光景を見たいものです。



おすすめ書籍



W・G・ゼーバルト著『アウステルリッツ』（白水社）
ドイツ出身のゼーバルトは、イギリスを拠点に大学で教鞭をとりながら文筆活動を行い、ノーベル文学賞候補と目されていましたが、不慮の死を遂げた作家です。埋もれている記憶や歴史を秘めた事物から、ヨーロッパ近代がもたらした破壊と惨禍を描く作品に、狼狽えながらも引き込まれていった昔が、昨日のように思い出されます。遺作となった『アウステルリッツ』は、歴史に関する記述と作家の心象風景が入り交じり、読者を不思議な世界に誘ってくれます。読後は歴史の深淵と運命の儚さに戦くばかりでした。

生徒総会が行われました

7月7日、生徒総会が行われました。新型コロナウイルス感染症対策のため、今年の総会は放送による書面開催となりました。生徒会長の中塚涼太君の挨拶のあと議長団が選出され、議長の進行で議事に入りました。事務局から令和元年度の会務報告と決算報告、令和2年度行事予定案と予算案について説明があり、次に代議員が各クラスの賛否を集約して議事承認用紙に結果をまとめ、放送室の本部に提出するというプロセスを踏んで審議が行われました。また、生徒からの要望についても丁寧な回答がありました。例年とはまったく異なる状況でしたが、創意工夫をこらしスムーズに進行してくれました。最後に私から講評を述べ、①この一連の手続きは世の中のあらゆる組織で行われており、生徒諸君が社会人になった時、必ず経験する民主的な合意形成の手段であること、②生徒会活動の目的に触れてから、多くの学校行事が延期や変更を余儀なくされている時だからこそ、生徒諸君の主体的な取り組みと建設的な提案が求められること、の2点について伝えました。

新生徒会役員始動！前進！

7月14日、生徒会役員選挙が行われました。今年度はコロナ禍のため放送による演説があり、昨年同様、信任投票となりました。即日開票の結果、立候補者全員が当選しました。7月16日には生徒会役員認証式が行われ、私から当選した14名の生徒に認証状を手交しました。新役員となった14名の生徒諸君！伝統ある相馬高校生徒会役員への当選おめでとうございます。皆さんには相高のリーダーとしての誇りを持ち、信任してくれた生徒の期待に応えるべく、全力で取り組んで欲しい。馬陵祭に代わる体育祭を円滑かつ有意義なものにするため、「自分は何をすべきか」「自分には何ができるか」を常に考えながら、一つ一つ課題をクリアしていくことが大切です。また、自分の考えを丁寧に伝え、仲間の意見に謙虚に耳を傾け、合意を形成する粘り強さも必要でしょう。皆さんなら必ず成功に導いてくれると確信していますので、田中暖々会長を中心に生徒会活動の活性化をお願いします。心から期待しています。



認証状を手にする新生徒会役員の皆さん

防火避難訓練が行われました

7月3日、期末考査終了後に防火避難訓練が行われました。今回の訓練は、福島県沖を震源とする強い地震により、家庭実習室から出火したという想定で行われました。避難開始から生徒全員の点呼が完了するまでの時間は、1学年が4分20秒、2学年が2分31秒、3学年が4分31秒でした。生徒諸君は試験勉強で疲れているにもかかわらず、避難経路を通じて粛々と避難しました。私の講評では、防災意識の涵養、迅速かつ安全な避難行動、避難経路の確認が訓練の主な目的であることを確認し、福島県全体と相双管内の火災発生状況を紹介しました。また、火災で恐ろしいのは煙であることに触れ、いざと言う時、迅速で冷静な避難行動ができるよう話をしました。生徒諸君が訓練に整然と取り組む姿に感動さえ憶えました。

マッド先生ありがとうございました

7月22日、ALTのマッド先生の最終授業が行われ、大関佳奈子先生担当の1年1組コミュニケーション英語にT2で入りました。マッド先生は、ワークシートを使った状況説明の活動では、生徒のサポートを積極的に行い、英語でクイズに答えるグループ活動では、出題者として生徒の答えを上手に引き出していました。マッド先生は米国バーモント州出身で2015年来日。本校には週に一日の割合で勤務いただきました。このたび帰国することになりましたが、生徒たちが大変お世話になりました。ありがとうございました。紙面を借りてあらためて御礼申し上げます。



戻ってきた優勝カップ ～よみがえる春高バレーの感動～

7月3日、春高バレーの優勝カップ（FTV杯）が久しぶりに学校へ戻ってきました。昨年度、本校男子バレーボール部は全日本バレーボール高校選手権大会（春高バレー）の福島県代表決定戦で優勝を果たし、2年ぶり21回目の全国大会出場を決めました。その時に授与された優勝カップは、試合中のアクシデント(?)によりカップ本体が傾いてしまい、長らく修理に出されていました。早速、校長室に飾らせていただきました。優勝カップは新調された台座にまっすぐに据え付けられ、神々しい光を放っています。

約8ヵ月ぶりの再会はこの上ない喜びです。カップには歴代優勝校の校名を記したペナントリボンが取り付けられており、大会の長い歴史を伝えています。セピア色にくすんだペナントに記されたインクの文字が滲んだものがあれば、真新しいペナントもあります。これらを見ていると、優勝校の選手や関係者の喜びが感じられるとともに、あらためて春高バレーの感動が思い出されます。



3学年生き方・あり方講演会が行われました

7月13日、3学年を対象に「将来の生き方・あり方を考える講演会」が行われました。生徒の学習意欲と社会人基礎力の向上を目的に、(株)グローバルキャリア代表的的場亮氏をお招きし、「一瞬の感動を人生のきっかけに」の演題でお話を頂戴しました。講演は「あなたの目標は何ですか?」「あなたの実現したいことは何ですか?」「あなたは1年後の今日どうなっていたいですか?」という問いかけで始まり、

自分の意識を変える方法や、効果的な目標設定について、駒大苫小牧高校野球部、浅田真央選手、イチロー選手の動画ムービーを活用しながら、分かりやすく伝える内容でした。生徒諸君には素直な心、感謝の気持ち、向上心を胸に刻み、自分の人生を切り拓いて欲しいと思います。



1学年スマホ・ケータイ安全教室が行われました

7月16日、1学年を対象に「スマホ・ケータイ安全教室」が行われました。生徒達はNTTドコモの講師からスマートフォンと携帯電話の正しい使い方について学びました。SNSに安易な投稿をして被害者になったり、冗談のつもりで投稿が炎上したりしたケースや、LINEなどのコミュニケーションアプリに友人を誹謗中傷する書き込みをしていじめの加害者になったケースなど、ドラマ仕立ての動画を見ることで分かりやすく理解することができました。また、表情や声の調子が分からない文字だけのやりとりは、本当の気持ちが伝わりにくく、誤解される場合があることや、夜遅くまで長時間

スマホを使うことによる問題など、多岐にわたり大切なことを学ぶことができました。近年、SNSやコミュニケーションアプリに関連したトラブルに高校生が巻き込まれるケースが頻発しています。長時間の使用は学習に悪影響を及ぼし、依存症の心配があります。生徒諸君には使用時間にルールを設け学習時間を確保するとともに、正しく使うことでトラブルに巻き込まれないこと、自分を高めることに活用することを切に願っています。



ドローン実技講習会

7月1日、イノベーション・コースト構想を担う人材育成事業のプログラムの一つとして、ドローン実技講習会が行われました。参加した科学部の生徒たちは、ドローンの仕組みと操作に必要な法律の知識について講義を受けた後、実際にドローンの操作を体験しました。生徒たちの真剣な眼差しが空中でホバリングするドローンに注がれ、コントローラーを持つ手に神経を集中させて、ドローンを前後左右に移動させていました。私も生まれて初めてドローンを操作させていただきました。



ICT校内研修会

6月30日、教職員を対象にICT活用のための第2回校内研修会が行われました。GoogleClassroomをはじめとするGsuiteの様々な機能について、これまでの疑問点を解決することが目的でしたが、情報処理委員の先生方が手分けしてサポートにあたり、先生方は活用に関する知識や技術を高めることができました。今回の研修を今後の教科指導や校務処理に生かしていただきたいと思います。



【お知らせ】

日本考古学協会が6月30日に発行した「日本考古学協会第86回総会研究発表要旨」に郷土部の研究発表の内容が紹介されています。テーマは「『野馬土手』の現状と意義」です。

同窓生列伝⑮折笠晴秀 (1885-1965) 続編 ～折笠と成田三千郎先生の胸像～

校長室の入り口脇に、旧制相馬中学校の名物教師であった成田三千郎先生のブロンズ製胸像が飾られています。先生は相馬中学が開校した明治31年4月から大正11年2月に亡くなるまで、23年11か月の長きにわたり勤務されました。先生は明治元年11月に青森県の旧津軽藩士の家に生まれ、青森県師範学校卒業後、青森県と山口県の小学校勤務を経て、相馬中学に赴任し歴史地理を担当しました。生徒に対する先生の影響力は大きく、同窓生の回想や『校友会雑誌』には、威厳に満ち尊敬される先生の姿が伝えられています。例えば、相中第19回卒の松田一氏は「創立以来の成田先生(中略)など何か知識の受け売りではなく心から教育し、鞭撻する深い親心が感じられてありがたかった」と記しています。明治39年8月の馬城会総会に客員として出席した先生は、師弟の情誼について熱く語り、明治43年5月の創立記念日の式典において、創立当時の思い出を語るその姿は、厳然たる威容と満面の愛嬌で生徒達に強い印象を与えました。また、大正2年5月の創立十五周年記念式典では、終始一貫、学校の発展に尽力したとして表彰を受けています。

ところが大正10年8月、成田先生はにわかに病を得、闘病生活に入ります。病名は膀胱ガンでした。治療のため上京、泌尿器科の権威であった折笠の病院に入院し手術を受けました。やや快方に向った先生が相馬に帰る折は、折笠本人が万一に備え医療器具を携帯して随伴しました。その時、数名の同窓生も付き添っています。帰相後は中村町宇多川町で開業していた荒川栄五郎(相中第2回卒)が主治医として治療に当たりましたが、同窓生同士の折笠と荒川の間で引き継ぎが行われました。その後、闘病の甲斐なく、大正11年2月に先生は現役のまま逝去します。享年50歳でした。相中関係者全員がその死を悼みました。

その後、昭和9年2月の命日に十三回忌の法要が東京日暮里も本性寺で営まれましたが、同年8月、その記念と同僚だった菊地伊三郎先生の古希のお祝いを兼ねて、二男の成田儀六氏によって同窓会名簿が作成されました。その巻頭には次のようなエピソードが記されています。成田先生が折笠病院に入院中、帝国ホテルの設計監督に当たった建築家の遠藤新氏(相中第6回卒)は、ロシア人の女流彫刻家チェレミノフに先生の胸像を作らせ、それを原型として作られた4基のブロンズ像は、1基が母校相馬中学の校長室に、他の3基が折笠、遠藤、儀六氏で分けたと。現在、校長室にある胸像は、チェレミノフ女史が制作したものと思われ、その由来は、折笠、遠藤など同窓生の恩師に対する敬慕の心にあると言えるでしょう。

ところでチェレミノフ女史はロシア革命の混乱を逃れて日本に亡命してきた芸術家のようなです。大正10年に開校した文化学院の講師を務めた関係で、多くの文化人や政治家と交流がありました。確認できる範囲では、画家の黒田清輝と有島生馬、小説家の有島武郎、歌人の与謝野鉄幹・晶子夫妻、貴族院議員寺島誠一郎、彫刻家の武石弘三郎など多岐にわたりました。おそらく遠藤とも何らかの繋がりがあったに違いありません。また、儀六氏は大正5年に相馬中学から東京帝国大学に進学し、卒業後は1年間、相馬中学で英語の教鞭をとりました。その後、実業界に転じ川崎第百銀行取締役、川崎貯蓄銀行取締役を歴任し、昭和27年から33年まで馬城会の会長も務め、本校の発展に尽くしました。

左：創立15周年時の成田先生
右：校長室にある成田先生のブロンズ製胸像

